

映画用脚本

第36回（2010年）城戸賞最終候補作品

## 『国崩しの砦』

作 #13

## 登場人物

森上時市 (男・33)	御子柴家家老
杉江征四郎 (男・27)	森上時市の従者
遠藤孫蔵 (男・63)	御子柴家家臣
正吾 (男・16)	漁師の少年
御子柴克信 (男・61)	御子柴家当主
神事守重 (男・55)	御子柴家宿老
坪内憲長 (男・36)	御子柴家侍大将
由比 (女・26)	森上時市の妻
セツ (女・55)	由比の侍女
八雲貞道 (男・34)	八雲家当主
生駒恒幸 (男・51)	八雲家副大将
柚木満久 (男・52)	八雲家家臣
乾忠春 (男・40)	佐倉家家臣
サキ (女・18)	百姓
辰二 (男・47)	同右
茂吉 (男・20)	同右

### ○ 船団(早朝)

時は戦国。

濃い朝霧の中、凩いだ海を五〇隻ほどの密集した船団が行く。

船のほとんどは兵員輸送船(全長約一〇メートル)で、それぞれに具足(甲冑)姿の兵たち数十人が乗っている。

櫓を止め、潮の流れに乗って音を立てずに進む船団。

船上の兵たちも皆、緊張して息を殺している。

### ○ 忠春の関船(早朝)

輸送船群を囲み、護衛している数隻の関船(船体上部が矢倉になった軍船・全長約二〇メートル)。

その中の一隻、船団の先頭に位置する関船の矢倉の上に、船大将・乾忠春(40)と数人の部将たちがいる。

見通しのきかない周囲を警戒して、

部将A「殿、やはり思い過ぎでは」

忠春「いや、鳥じゃ。鳥が鳴いておらん」

### ○ 船団(早朝)

徐々に霧が薄れ、周囲の様子が見えて来る。

船団が進んでいるのは、幅一〇〇メートルほどの狭い海峡である。

### ○ 忠春の関船(早朝)

部将B「指さして」あれを！」

船の横方向、霧の切れ間に見える岸。

その段々畑に、鉄砲を構えた大勢の兵が並んでいる。

忠春「叫ぶ」早櫓じゃ！ 鉄砲放て！」

合図の法螺貝と太鼓が鳴らされる。

### ○ 海峡の戦闘(早朝)

海峡の両岸に展開している数百人の敵の軍勢。

敵組頭「放て！」

鉄砲隊が船団に向けて発砲。

輸送船や関船で、大勢の将兵が倒れる。

船団、反撃しつつ懸命に櫓を漕ぐが、繰り返される斉射に多くの犠牲を出す。

岸の敵軍、大量の火矢を発射。

その攻撃に、木造の輸送船と関船はひとたまりもなく炎上してゆく。

### ○ 忠春の関船（早朝）

激しい敵の攻撃の中で、

忠春「堪えよ！ 撃ち返せ！ あと少してこの瀬戸を抜ける！」

忠春の近くで、部将Bが前方を凝視している。

忠春「どうした？」

部将B「指さして」 殿、あれを」

船団の前方、片側の岸が霧の中に消えている辺り。

そこに、何か巨大な建造物の輪郭が浮き上がっている。

方形の土台部分、その上には二層の天守（天守閣）らしき物。

忠春「（驚き） 砦か？」

部将B「しかし、こんな所に砦は……」

ふいに、その建造物の一部で小さな爆発が起こり、ヒュルヒュルと音を立てて何かが飛来、関船の一隻に命中して大爆発を起こす。

忠春「!!」

### ○ 船団（早朝）

爆発した関船は、矢倉を半分ほど吹き飛ばされている。

さらに三度、建造物から撃ち出された物が飛来し、爆発で多くの船が破壊される。

### ○ 忠春の関船（早朝）

部将B「（愕然） まさか、国崩しとは……」

霧が流れ、建造物の姿が次第に明らかになってきている。

目を凝らした忠春、驚いて、

忠春「（息を飲む）!!」

### ○ 建造物（早朝）

黒い壁の砲門。

突き出された大砲の筒先が火を噴く。

○ 忠春の関船（早朝）

空気を裂く音が、真つ直ぐ忠春へと向かって来る。

忠春「（絶叫） おおおおっー！」

砲弾が忠春の関船を直撃、爆発。

忠春も吹き飛ばされて――

○ メインタイトル

『国崩しの砦』

○ 日崎城・全景

海に突き出した小高い岬を利用して築かれた城。

三層の天守を中心とした小規模な縄張である。

城の周囲三方は海に向かって落ち込む急な斜面で、残りの一方、

岬の付け根の部分に大手門が置かれている。

○ 同・大手門

閉ざされた大手門。

その脇の矢倉の上に、具足姿の森上時市（33）が立ち、厳しい顔で城外を見ている。

大手門の前に広がる田園地帯に布陣している約一万の軍勢。

日崎城は敵の大軍と対峙している。

城堀内に詰める兵たちの間を抜け、杉江征四郎（27）が矢倉に上がって来る。

征四郎「時市様、ただ今戻りました」

時市「苦勞。佐倉の援軍の事、どうだった？」

征四郎「はい。未だ何の報せもないとの事にございます」

時市「うむ……」

征四郎「静かですな」

と、征四郎、全く動きのない敵陣に目をやる。

征四郎「八雲の軍勢がこの城を囲んで今日で五日。田を荒らし町を焼いても、城に仕掛けて来る気配は一向にございません。さりとして付城も築かず、

時を費やして干殺しにする様子でもない。——この静けさ、兵たちは皆気味悪がっています。八雲は、まるで何かを待っているようだ」と

時市「待っている？」  
征四郎「はい。それが何かは分からぬのですが……。それに、そもそも私には解せません。この数年、八雲は戦に戦を重ねて東へと領地を拡大。近く田辺三橋の連合軍とも一戦に及ぶはずです。その八雲が、なぜ今の時期に我が御子柴のような西の小国を攻めるのか。とても利のある事とは思えぬのですが」

時市「……」

不気味に静まりかえった敵・八雲の陣。

### ○ 同・天守・外観

### ○ 同・同・一階

軍議のための部屋。

御子柴家当主・御子柴克信（61）の前に、宿老・神事守重（55）、侍大将・坪内憲長（36）ら重臣たちが居並んでいる。

憲長「（克信に）恐れながら御屋形様、佐倉家の方々、怖気づかれたものかと存じます。いくらこの城が名高い堅城だとはいえ、攻める八雲勢は一万、それに対し我が御子柴はたったの千七百。加勢するには、あまりに分の悪い戦と考えたのでございましょう」

守重「何を申すか。佐倉様は盟約を違えるようなお方ではない」

憲長「では、神事様はこの状況をどう御覧になられます。誠ならば佐倉家の援軍、昨日のうちには着いているはずなのですぞ？」

守重「（言い返せず）……」

克信「憲長、お前の疑心ももつともだが、わしはやはり佐倉殿を信じたい。遅れても援軍はきつと来る」

憲長「はっ」

克信「良いな。援軍が来たなら我らも城を出、八雲を挟み撃ちにして一気に勝負を掛ける。皆、頼むぞ」

重臣たち「はっ！」

使番（伝令）がやって来る。

使番「申し上げます」

守重「来たか、佐倉勢！」

使番「はっ。あつ、いえ」

守重「何じゃ？」

使番「ただ今、城の下の海に――」

### ○ 日崎城の下の海

日崎城の岬の近くの海上。

船の残骸らしき材木にしがみ付き、一人の具足の男が漂流している。

前出の船団の船大将・忠春である。

忠春は目を閉じ、重傷を負った体は動かない。

### ○ 日崎城・天守・最上階

克信と守重が、窓から眼下の海を見ている。

守重「あの具足は、確かに佐倉の乾忠春殿」

小さく見えている忠春、こちらに向かって弱々しく手を上げる。

守重「喜び」おお、生きておられる！」

克信「険しい顔」守重」

と、克信、忠春の流れて行く先を示す。

城外の船着場から、八雲兵たちの乗った小舟が出て来る。

### ○ 日崎城の下の海

再び気絶している忠春。

八雲兵たちの乗った小舟が、その横に来て止まる。

足軽大将「やれ」

八雲兵「はっ」

八雲兵の一人が、刀で忠春の首を取ろうとするが、

足軽大将「待て。ここで血は面倒だ。まずは岸に上げろ」

八雲兵たち、忠春に手を伸ばす。

と、突然、忠春の体が水面を走り、急速に小舟から離れて行く。

### ○ 日崎城・天守・最上階

驚いて見ている克信と守重。

忠春、どんだん岸の方に近付いて来る。

## ○ 日崎城の下の浜

日崎城を囲む急斜面、その下の狭い浜。

海中から、粗末な身なりの少年・正吾（16）が現れる。

無人の浜に駆け上がり、持っていた縄を引き始めて、

正 吾「おい、手貸せ！」

縄の先は、海上の忠春の体に結ばれている。

正 吾、浜の向こうから走って来る大勢の八雲兵に気付いて、

正 吾「あせり）おい、いるんだろ？ 早く出て来て手貸せ！」

斜面の茂みが割れ、そこに隠されていた横穴の中から、二人の

御子柴兵が出て来る。

御子柴兵 A「戸惑い）お前、この辺の漁師か？ この穴の事、なぜ知って——」

八雲兵の放った矢が足元に突き刺さる。

御子柴兵たち「！」

御子柴兵たち、慌てて縄を引く。

八雲兵が迫る。

正 吾たち、海から引き上げた忠春を担ぎ、横穴に逃げ込む。

## ○ 日崎城・抜け穴

横穴は木材で補強された人工的な物で、ずっと奥まで続いている。

少し進んだ御子柴兵 A、穴の天井から下がる鎖を引く。

正 吾「何だ？」

御子柴兵 A「仕掛けだ」

鎖は錆びついて動かない。

入口の外に、八雲兵たちが現れる。

正 吾、手を貸して力いっぱい鎖を引く。

仕掛けが作動し、入口付近の天井が数メートルに渡って崩落。

八雲兵「！（慌てて止まる）」

大量の土石により、穴は完全に塞がる。

## ○ 同・ある倉の中

床板に偽装された戸が開き、中から泥まみれの御子柴兵 A が出て来る。

外から（通常の戸から）、守重が足早に入ってきて来て、

守重「どうした、一体何があったのじゃ？ 乾殿は？」

守重、床の戸の中を覗き込む。

そこは抜け穴の終点。

へたり込んだ御子柴兵Bの横で、正吾が忠春の肩を揺すっている。

正吾「おい、しっかりしろ、お侍！ 今、何て言った？ えっ？」

忠春、微かに意識を取り戻している。

忠春「(うわ言) 国崩し、黒い砦……あれは……化け物」

忠春、がつくりと頭を垂れる。

### ○ 同・天守・一階(夕方)

時市がやって来る。

時市「森上時市、参りました」

克信「入れ」

時市「はっ」

時市、室内にいる克信と守重の前へ。

克信「大手門の守備、大儀だった。兵たちの様子はどうか？」

時市「援軍が来ぬと分かり、士気は目に見えて落ちております。このまま、

あの大軍との睨み合いが続きましたら、どんな綻びが生ずるやも」

克信「うむ……」

守重「時に時市、お主、八雲が何やら新たな戦道具を用意しておるとい話

は聞いた事があるか？」

時市「はい。八雲領内の間者から、そうした噂があるとの報せがあったと」

守重「その噂、誠であった。その新たな戦道具というのは国崩しじゃ」

時市「(驚き) 国崩し？ 八雲は、すでにそんな物まで……」

守重「佐倉の乾殿、手傷が酷く予断を許さぬが、うわ言によっておよその事

は分かった。佐倉の船団、鹿辺の瀬戸で国崩しを撃ち掛けられ、それ

によつて壊滅したものらしい」

時市「……！」

守重「しかも、その国崩し、尋常の物ではないようなのじゃ」

ずっと部屋の間控えていた男を示し、

守重「時市、その者は知っておったかな。兵具奉行・藤谷の下で火薬を受け

持っておる遠藤孫蔵じゃ。——孫蔵、時市に」

孫蔵「はっ」

遠藤孫蔵（63）、時市に向き直って、

孫蔵「それでは恐れながら申し上げます。森上様、国崩しについてはいかほど御存知でしょうか。これまでに御覧になった事は？」

時市「いや。だが、つまりは鉄砲を大きくした物であるう。しよせんはただ鉄の玉を遠くに飛ばすというだけ。玉をぶつけるよりはむしろ、撃ち出す時の音で敵を怯ませるための物だと聞くが」

孫蔵「その通りにございます。しかし此度の八雲の物、ただ今、神事様の仰せられましたように……」

と、孫蔵、ボロボロになった一組の具足を見せる。

孫蔵「乾様が御身に着けておられた具足にございます。お分かりになりますか？」

具足は全体が焼け焦げて変形、胴には大きな裂け目が出ていてる。

孫蔵「これは、ただ火に焼かれたものでも、まして槍や鉄砲によるものでもございません。おそらく、国崩しの玉が破裂したものと」

時市「何？」

孫蔵「私も詳しくは存じません。しかし昨年の暮れ、堺に赴いた際に、南蛮の商人からそのような玉があると聞き及びました。中に火薬が詰めてあり、敵の元に飛んで行って破裂する。その威力、丘をも吹き飛ばすほどの事にございます」

時市「（絶句）……」

守重「八雲が兵を動かさぬのは、その国崩しの到着を待っておるからに相違ない。三方を海に守られ、この城は難攻不落を誇っておる。しかし、全ての兵を正面に集中出来たとて、そんな物を使われ、一万の軍勢に攻められては、果たして防ぎ切れるかどうか」

時市「……」

克信「時市」

時市「はっ」

克信「そこでお前に頼みたい。至急、何人か連れて密かに八雲領に入り、その国崩しを破壊してはくれぬか」

時市「（驚き）は……？」

克信「うわ言につき詳しくは分からぬが、乾殿は、国崩しは八雲の砦から撃つて来たと申しておる」

時市「砦？ 鹿辺の瀬戸にございますか？」

克信「うむ。あそこを通る船に睨みをきかせるために、新たに築いた物だろう。これまで我らの耳に入らなかった事からしても、さほど大きな物ではないはずだ」

時市「うなずく」

守重「今のところ、街道の見張りからは異状を告げる報せはない。国崩しは、まだその砦を動いてはおらんのだ。運ばれる時には厳重な警固がつくであろうし、八雲も、まさか今、砦が襲われるとは思っていないはず」

克信「無論、この城の守りには誰よりお前が必要だ。それに今は、お由比の事もあるからな。わしとしても辛いのだが、こんな務めを託せるのは、お前をおいて他にない。——難（かた）き務めとなるだろう。だが時市、行ってくれるな？」

時市、力強く頭を下げ、

時市「はっ！ この森上時市、一命に代えましても」

克信「うなずく」

### ○ 同・時市の家・外観（夕方）

城内にある一戸建。

征四郎の声「では、出立は今宵亥の刻に？」

### ○ 同・同・内（夕方）

時市が、征四郎の手を借りて具足を脱いでいる。

時市「八雲勢が寝静まるまで待つべきかも知れんが、少しでも早く出立したい」

征四郎「ただ一つ残っていた抜け穴が、昼間の騒ぎで埋まりました。まず、この城をどう出るのが難題でございますな」

時市「うむ。それに、敵領内を気取られぬように進むのだ。人数はわしとお前、その兵具奉行の所の遠藤孫蔵、それに加えてあと五人というところか。お前に任せる、良き者を集めてくれ」

征四郎「はっ。では」

と、部屋を出て行くとする征四郎に、

時市「ああ、征四郎……。妻子のおる者は避けるようにな」

征四郎「苦笑して）またでございませうか。ならば時市様御自身はどうなります。それに、そう上手くゆきますかどうか」

時市「ん？」

征四郎「御子柴家の命運を懸けたお務めで時市様のお供が出来る。そう聞いて連れて行けと言わぬ者が、果たして城内にどれだけおりますやら」

時市「苦笑」何を申す」

征四郎、去って行く。

時市は戸を開けて隣の部屋へ。

ここでは、臨月を迎えた時市の妻・由比（26）が、侍女・セツ（55）と何か手仕事をしている。

時市「由比。駄目ではないか、またそのような」

セツ「申し訳ございません」

時市「良い。いずれ、また由比がどうしても聞かなかったのであろう」

セツ、一礼して部屋を出て行く。

時市「あれほど、休んでいろと申したのに」

由比「大事ございません」

時市「だが、そなたと夫婦（めおと）になって五年、ようやく授かった子ども。無理をして、もしもの事があつたらどうする。（腹の中の子に）う？」

由比、嬉しそうに笑うが、

由比「心配」征四郎とのお話、聞いていました。いらっしゃるのですね、八雲に……」

時市「うむ。家中に、わしほど八雲の地理に明るい者はおらんからな」

由比「それはそうですが……」

時市、由比の手元を見る。

由比は鉄の型を使い、小さな鉛玉を作っていたところ。

時市「じつと見て）……」

由比「何か？」

時市「今まさに新たな命を生もうとしているそなたが、こうして懸命に人の命を奪う鉄砲の玉を作らねばならん……。一体何なのだろうな、今のこの世は……」

由比「……」

由比、時市を見つめて、

由比「無事にお戻り下さい。待っています」

時市「……」

時市、由比を抱き締める。

○ 田園地帯(夜)

かがり火を焚き、大軍が日崎城の包囲を続けている。  
大手門から数百メートル離れた丘の上に、幕を巡らせた八雲の  
本陣がある。

○ 八雲の本陣・内(夜)

八雲家当主・八雲貞道(34)と、大勢の重臣たちがいる。  
副大将・生駒恒幸(51)、絵図を示して、

恒幸「ここに、それにここ。土地の百姓どもが籠っておりますので、  
御指図通り糧食を奪い、皆殺しにいたしました。明日は、山狩りをこ  
の川筋から西に広げます」

貞道「うなずく」

恒幸「あと御屋形様、一志源右衛門が参っておりますが」

貞道「一志？」

恒幸「今日の昼間、舟で、乾忠春をさらわれました足軽大将でございます」

貞道「その者か。——会おう」

○ 同・前(夜)

平伏し、震えている足軽大将・一志。

幕の中から、貞道と恒幸ら重臣たちが出て来る。

恒幸「一志、有難くも御屋形様直々の御目通りじや。事の次第、申してみよ」  
一志「はっ。それでは恐れながら申し——」

貞道、鮮やかな一太刀で一志の首を落とす。

重臣たち「!」

周囲の将兵、愕然。

貞道「(平然と)この首、良く見えるよう、ここにさらしておけ」

恒幸「は……?」

貞道「あれが着くのは明後日だ。それまで、兵どもの気を引き締めておかね  
ばならん」

恒幸「はっ」

遠くで一発の銃声が響く。

恒幸「何事!」

○ 日崎城・城塀の外（夜）

大手門から左右に伸び、岬の付け根を塞いでいる城塀。  
その狭間（射撃用の穴）から鉄砲が放たれ、八雲勢のかがり火  
を次々と倒して消してゆく。  
法螺貝の音が響き、城塀の上には、城内で動く多くの旗指物や  
槍の先が見える。  
「出て来るぞ！」「門の前を固めよ！」などと叫び、浮き足立つ  
八雲勢。

○ 同・崖の上（夜）

城塀の方から聞こえる騒ぎの音に、  
征四郎「始まりましたな」

曲輪の端、海に落ち込む垂直の崖の上。  
柵の際に、時市と征四郎に加え、関左馬進（22）ら五人の屈  
強の兵たちがいる。  
全員が黒い衣装に身を包み、具足は着けていないが、腰に二本  
の刀を差している。

孫蔵「遅くなり申した。これで全てじゃ」  
大きな木箱を抱えてやって来た孫蔵、それをすでにある他の荷  
物とまとめて置く。

孫蔵、高さ十数メートルの崖を覗き込む。  
崖の下に浜はなく、大岩がいくつか波間に突き出ているだけ。

孫蔵「（怖気づき）あの、念のためじゃが、誠に……から……」

征四郎「昼間の騒ぎで、城周りの見張りが厳しくなつてな。あと手薄なのはこ  
こだけだ」

崖の近くの海上にいた八雲兵の小舟が、城塀の騒ぎの方へと漕  
いで行く。

時市「よし。まず、わしと征四郎が降りる。次に孫蔵。左馬進たち五人は、  
その兵具火薬（木箱などの荷物）を担いで続け」

左馬進たち「はっ」

時市、柵に結んだ長い縄の先を崖下に投げ下ろす。

孫蔵、オロオロと落ち着かない。

征四郎、おどけて左馬進たちに、

征四郎「お前たち、しかと（孫蔵の）面倒見てやれよ」

左馬進「はっ。年寄りをいたわるは、この御子柴の習いなれば」  
征四郎「(笑う)」

### ○ 八雲の本陣・前(夜)

日崎城の方を見ている貞道と恒幸。  
城の手前の田園地帯では、包囲の兵たちが慌しく動いている。  
城塀の辺りで銃声が響き、また一つかがり火が消える。

恒幸「勝ち目なしと見て、兵が疲弊する前に討って出る気にございましょう。

御屋形様、御下知を」

貞道「これは違う」

恒幸「は？」

貞道、空の月とその近くの雲を指し、

貞道「あと四半刻もあれば、月はあの雲に隠れる。かがり火を消すなら、なぜそれを待たん。これは陽動だ。陣を整え、城周りの見張りを厳となすよう伝えよ」

恒幸「はっ！」

### ○ 崖(夜)

縄を伝って降りて来た征四郎、海から突き出た大岩の一つに立つ。

先に降りていた時市、上に向かって合図。

左馬進たちにながさがされ、孫蔵が縄を伝い始める。

崖の面に足を着き、危なっかしい降下。

と、時市と征四郎、城塀の方向から浜をやって来る一人の八雲兵に気付く。

八雲兵、浜の端から崖下の岩に跳び移る。

身を隠し、孫蔵に手を振る時市たち。

しかし、孫蔵は気付かない。

周囲を見回す八雲兵。

孫蔵、ようやく八雲兵に気付くが、崖から石を蹴り落としてしまふ。

八雲兵「!(上を見る)」

崖の途中に生えた松の太木に隠れ、孫蔵の姿は見えない。  
異状なしと見た八雲兵、浜の方に戻って行く。

孫藏、安堵するが、目の前の松の枝に誰かいると気付いて、  
孫藏「思わず大声」いいっ！？」

それは、漁師の少年・正吾。

正吾、わずかな手掛かりを伝い、身軽に崖を降りて行く。  
声に気付いて戻って来た八雲兵、孫藏を発見、呼子を鳴らす。

時市「！」

岩伝いに飛び出した時市、抜刀して八雲兵を斬り、

時市「孫藏、急げ！」

その時市の前に、正吾が飛び降りて来る。

正吾「おい、お侍。俺も連れてけ」

時市「驚いて）何？」

正吾「鹿辺の瀬戸の砦に斬り込むんだろ？俺も連れてけ」

孫藏、どうにか下の岩に着く。

崖の上、木箱を担いだ左馬進が縄を降りようとするが、周囲に  
多数の着弾。  
戻って来た小舟から、八雲兵たちが鉄砲を撃っている。

左馬進たち五人、やむなく後退。

銃撃をかくぐり、征四郎と孫藏が時市の所に来て、

征四郎「時市様、これまでにございます。我らだけでも脱出を」

時市「うなずく」

時市たち、浜に降り、岬の付け根の方向（城塀の方向）へと走  
り出す。

正吾は、すでにずっと前を走っている。

## ○ 松林（夜）

浜から上がった時市、征四郎、孫藏が城塀を背にして走り出す。  
林のすぐ外には八雲の軍勢がいる。

部将「三人に気付いて）あれに！捕えよ！」

殺到する八雲兵。

時市と征四郎、敵を斬って進む。

孫藏はまるで役に立たない。

二騎の騎馬武者を倒した時市たち、その馬を奪う。

一頭に時市、もう一頭に征四郎と孫藏が乗り、走り出そうとするが、

時市「……！」

林の外の田の畦道で、正吾が八雲兵に囲まれ、槍を突き付けられている。

時市、馬の向きを変え、正吾の方へ。

征四郎「驚き」時市様？ お捨て置き下さい！」

### ○ 八雲の本陣・前(夜)

貞道と恒幸が、眼下の田園地帯を馬で進む時市を見ている。

向かって来る敵を、走りながら次々と斬り伏せる時市。

恒幸「あの手練、森上時市……」

貞道「……」

貞道、時市をじっと見ている。

### ○ 田園地帯(夜)

敵兵を蹴散らした時市、正吾を馬の上に引き上げる。

すぐに、征四郎と孫藏の馬が追いついて、

征四郎「指さし」時市様！」

畦道を、三騎の騎馬武者がこちらへと走って来る。

さらにその後ろには歩兵の一団。

時市たち、馬を駆り、近くに見える城下町へと向かう。

### ○ 城下町(夜)

焼き討ちにより荒れ果てた城下町。

入り組んだ、障害物の多い路地を逃げる時市たちの二騎。

矢を射掛けながら追う八雲の三騎。

二人乗りの二騎は遅く、敵はどんどん迫って来る。

時市の背中にしがみつく正吾が、

正吾「おい、これ貸せ！」

時市「何？」

正吾「この、腰の長い方！」

時市、戸惑うが打刀を鞘のまま渡す。

正吾「そこ右！ 道の端走れ！」

辻を右に曲がる時市たちの二騎。

そこは広い通りで、道の中央に細い水路が伸びている。

馬の上から身を乗り出した正吾、打刀で、水路を覆う木の蓋をいくつか弾き飛ばす。  
追って曲がって来た八雲の馬、むき出しになった水路の溝に踏み込んで、

騎馬武者「！」

三騎、もつれ合つて激しく転倒。

## ○ 川(夜)

城下町を抜けた時市たちの二騎、大きな川に架かる橋を渡り始める。

その背後の岸に、八雲の鉄砲隊がいる。

時市たち、気付いていない。

組頭「火蓋切れ——狙え」

鉄砲の狙いが定まる。

そこに、追跡隊とは別の騎馬武者が来て、

騎馬武者「待て、撃つてはならん！」

組頭「は？」

騎馬武者「良いのだ。あの者ども、このまま行かせる。御屋形様直々の仰せだ」

時市たち、対岸に渡り、闇の中へと消えて行く。

## ○ 森の中(夜)

時市、正吾を馬から投げ落とす。

正吾「おい、何すんだ！」

孫蔵「あつ。此奴、あの乾様を助けた漁師の小僧にございます」

時市たち四人は、道から外れた森の中で馬を止めている。

時市、自分も馬を下りて正吾に、

時市「(怒り) お前、一体何のつもりだ。なぜわしらの脱出の邪魔をした。申

せ。返答次第では、このままだでは——」

と、時市、腰に手をやるが打刀がない。

正吾「おつ、これか？」

正吾、持ったままの打刀を見せる。

正吾「それに、声を上げて見つかったのは俺じゃねえ。この爺様(孫蔵)だ。

だろ？」

孫蔵「(ごまかそうと)ん——」

正吾「ほれ」

と、正吾、打刀を投げて返す。

時市「(気をそがれて)……お前、先程申ししていたな。わしらが鹿辺の砦に向かうという事、誰に聞いた？」

正吾「誰にも」

時市「ん？」

正吾「あの流れて来た侍の寝言聞いて、お主らが血相変えて飛び出してくんのだ。ちと考えりや誰にだつて分かる。——なあ、だからその斬り込み、俺も連れてってくれよ。お主らと一緒に生きてえんだ」

時市「……」

孫蔵「小僧。お前、戦に出たいのか？」

正吾「ああ」

孫蔵「歳は？」

正吾「一六」

孫蔵「ならば、あせる事はないわ。来年になればな、嫌でも陣夫役で——」  
正吾「馬鹿言え。小荷駄でついてって米や味噌担ぎたいんじゃねえ。俺は誠の戦がしてえんだ。敵の首取って御屋形様に褒められて、お主(時市)みたいなすげえ侍になりてえんだ！　なあ、だからいいだろ、俺も連れてくよな？」

時市「駄目だ」

正吾「なぜ!？」

時市「(冷たく)子供の来る所ではない。帰れ」

正吾「……」

時市、正吾に背を向けて、

時市「征四郎、孫蔵、出立する。街道には八雲の目が光っておろうし、いずれ国境(くにざかい)の番所は通れん。ここで馬を捨て、このまま山中を抜けて八雲領に入る。急げば、明日の午時(ひるどき)には鹿辺の瀬戸に着けるはずだ」

征四郎「時市様、恐れながら申し上げます」

時市「何だ」

征四郎「訳はともあれ、我ら、兵具火薬を全て失い、人数は当初の半(なかば)より減ってしまいました。猫の手も借りたいとは、まさにこの事。それにこの者(正吾)、御覧になりました通りの身の軽さで頭もなかなか切れます。試しに連れて行ってみるのも良いのではございませぬか？」

時市「征四郎……」

征四郎「大げさにうなずいて）お気持ちお察しいたします。しかし先程、わざわざ戻ってこの者を救ったのが良くありませんでしたな。この者は顔を知られてしまいました。今から、八雲勢でいっぱい城下に帰れというのも、それもまた随分と酷な仰せかと存じますが」

時市「……」

正吾、じつと時市を見ている。

時市「お前、名は何と申す」

正吾「正吾」

時市「（ため息）……まあ、猫よりは良いか」

正吾「喜び！」

征四郎「（正吾に）ただし、少しでも妙な真似をしたり、足手まといになったりしたら容赦はせん。良いな」

正吾「（侍ふうに）ははっ！」

歩き出す時市、征四郎、孫蔵。

孫蔵「出立じゃ。行くぞ、小僧」

正吾「応！」

正吾、満面の笑みで行く。

### ○ 鹿辺の瀬戸・全景（翌日の昼頃）

本土のすぐ近くに大きな島があり、長さ数キロ、幅一〇〇メートルほどの海峡を形作っている。

### ○ 同・本土側の浜辺

隠れて走って来た時市と孫蔵、岩陰から顔を出す。前方に見える浜は無人で、人工物は何もない。

### ○ 同・本土側の高台

高台の上、身を伏せている征四郎と正吾。立ち上がろうとする正吾を押さえて征四郎、海岸を見下ろす。近くの丘の上に小さな村がある他、海岸には見渡す限り何もない。

### ○ 小さな村

海峡の本土側、丘の上にある農村。

多くの家が打ち壊されており、人の姿は見えない。

海に向かう斜面、踏み荒らされた段々畑に時市と孫蔵がいる。

孫蔵、畑の土を舐めてみて、

孫蔵「二、三日内に相当な数の鉄砲を撃っております。この村の有様からしても、この鹿辺の瀬戸で戦があった事に間違いはございません」

村の外から、征四郎と正吾がやって来る。

時市「どうだった、征四郎？」

征四郎「はい。瀬戸を抜けた先まで探しましたが、やはり砦はおろか、八雲の兵の一人も見当たりません。この正吾など、俺が必ず見つけると、同じ所を幾度も走り回っておるような始末で」

正吾「なあ、砦、なかったらどうすんだ？ 俺、嫌だぞ」

征四郎「あちらの、島の側の岸でしょうか？」

時市「いや。何かあるなら、こちらからも見えているはずだ。だが、あえて渡ってみるか……」

手持ちぶさたの正吾、村の中を歩き回り、壊れた家を覗き込んでいたりしている。

孫蔵「おい、小僧。そんな所に砦はないと思うぞ」

正吾「分かんたろうが。年寄りは何事を決めつけていかん」

と、一軒の戸を開けた正吾、隠れていた村の女や子供たち十数人と目が合い、

正吾「え？」

女の一人・サキ（18）、短刀をかざして飛び出して来る。

正吾「ち、ちと待て——」

サキ「黙れ！ お前ら、何しに戻って来た！  
がむしやらに突き掛かるサキ。

無様に逃げ回る正吾。

時市、サキの腕を掴んで、

時市「待て、静まれ。我らが戻って来たとはどういう事だ？」

サキ「興奮）何っ……」

時市「お前、今、申したであろう。何をしに戻って来たのかと」

サキ「違うのか？ お前ら、八雲の侍じゃないのか！」

時市「違う。我らは隣国、御子柴の家の者だ」

サキ「御子柴……」

時市「うなずく」

脱力したサキ、短刀を取り落とす。

隠れていた家の中から、女たちが不安そうに顔を出す。

腰の抜けていた正吾、皆の視線に気付いて慌てて立ち、

正吾「威厳を作つて）う、うむ。相手が女と思ひ、ちと油断したかな」

### ○ 同・ある家の中

粗末な小屋。

戸口から、数人の女たちが中を覗き込んでいる。

柱にもたれて居眠りしている孫蔵。

時市と征四郎、サキと並んで座つた老婆から話を聞いている。

征四郎「それで？」

老婆「耳が遠く）ん？」

征四郎「それで？」

老婆「んー？」

征四郎「大声）だから、三日前の真夜中、いきなり八雲の軍勢が来て、お前たち村の者は皆（指さして）向こうの山に連れて行かれた。そして朝になり、濃い霧が出て来た。それで？」

老婆「ああ。それで、太鼓が鳴つて鉄砲が鳴つて戦が始まつての。山の陰で見えんかったが、ありや、この瀬戸を行く船と撃ち合つてたもんじや。で、少しして、魂消るような物凄い音がした」

征四郎、時市と目を見交わして、

征四郎「老婆に）その音、どんな音だ？ 詳しく申せ」

老婆「んー？」

サキ「あれは……ヒュルヒュルと何かが鳴つたあと、すぐそこに雷様が落ちたような、ドーンと地響きがして……」

老婆「ん。サキの言う通りじや。で、その音が十も鳴つて戦は終わり、八雲の侍ども、この村を荒らすだけ荒らして引き上げて行きよつた」

征四郎「サキに）では、婆様の申しておつた、村の男たちが皆無理やり連れて行かれたというのは、その時の事だな？ それで先程、お前たちは我らを見て、その八雲の者たちが戻つて来たものと思ひ、隠れておつたと」

サキ「うなずく」

征四郎「領主とはいえ、八雲の者たち、酷い振る舞いだな」

サキ「何が領主か、あんな奴ら——」

と、サキ、薪を投げる。

薪は、瓶の梅干を盗み食いしようとしていた正吾に命中。

正吾「いてっ！」

正吾、サキにガンを飛ばす。

平然と睨み返すサキに、

時市「サキと申したな。実は我ら、近頃八雲がこの辺りに砦を築いたと聞き、それを探しに参ったのだが、お前、知らぬか？」

サキ「砦？」

時市「うむ。この瀬戸の岸に、さほど大きな物ではないと思うのだが」

サキ「いや、砦など知らん。(戸口の女たちに)なあ？」

女たちも首を横に振っている。

正吾「(女たちに詰め寄り)えー？ 知ってんだろ？ 砦、あるんだろ？」

女たち、困った顔。

サキ「……この瀬戸、か？」

時市「ん？」

サキ「砦は城造りの番匠が造るな？ (女の一人に)なあ、この前、鍛冶の平作が来た時、八雲が城造りの番匠を大勢集めて、名越の入江に何か造ってるようだと話してたな」

女 A「えっ？」

征四郎「名越？」

時市「ここから海沿いに二里ほど行った所だ。(サキに)だが、あの辺りはわしも知っているが、入江などあったか」

サキ「森の獣道を入れて行った所に、山に隠れた大きな入江があるんだ。海からも陸(おか)からも見えんので、土地の者しか知らん。この中でも(女たちの中でも)、知ってるのは俺だけだろう」

女 A「あつ。そういえば八雲の侍、引き上げる時、これから名越に向かうつて……」

サキ「……!!」

征四郎「時市様」

時市、征四郎にうなづく。

時市「サキ。我ら、至急その入江に参りたい。お前、すまぬが——」

正吾「(慌てて)おい、ちと待て！ 嫌だ！ そいつ(サキ)を連れてくなら俺は行かんぞ！」

## ○ 街道

広く、人通りの多い道。

サキの後に続き、時市たち四人が歩いて行く。

恨めしげにサキを見ている正吾。

時市、征四郎、孫蔵の侍三人は粗末な着物と荷物で百姓に変装している。

一番後ろを歩く時市と征四郎が、

征四郎「やはり解せません。うわ言ですが、乾様は鹿辺に砦があつたと申され、あの村の者たちは国崩しの音を聞いたと申しております。しかし、あの通り鹿辺には何もなく、これから行く名越に八雲の砦があるのだといたしますと……」

時市「誰かが何か思い違いをしている、あるいは、誰かが偽りを申している」と

征四郎「はい」

時市「……」

その時市たちの前方では、正吾がサキの背中を蹴る真似をしている。

氣配に振り向くサキ。

正吾、さっと知らぬふり。

孫蔵、そんな正吾の隣を歩いていて、

孫蔵「呆れて」元氣じゃな、お前」

正吾「そりや、爺様と違って若いからな」

孫蔵「若い、なあ……」

正吾「何だ？」

孫蔵「お前を見ておると、かつてのわしを見るようで、どうにも不憫だな」

正吾「うん？」

孫蔵「わしの若い頃もそうじゃった。戦に出たい、手柄を立てたい、出世がしたい。わしの周りにいた仲間たちも皆そうじゃった。だが、それが今、どうなったと思う？」

正吾「爺様の他は皆、一国一城の主か」

孫蔵「死んだわ、皆。生き残った者もこのわしといひ勝負じゃ。何も成さぬうちに気付けば歳をとり、もはや戦に出ても手柄どころか走る事さえままならん。——だからな、悪い事は言わん。己には才がある、己だ

「けは他と違うと思うておる者も皆きつとそうなるのじゃ。だから——」  
正吾「お前も、己の身の丈に合った生き方をしろ、侍になって一国一城の主になんて考えるな、か？ ま、年寄りの言いそうな事だ。——だが爺様。この正吾様だけは誠の誠に他とは違つてな。尾張の織田がどうした。甲斐の武田がどうした。我こそは誰より先にこの日の本を平らげ、天下に号令する男なのよ」

そうはしやく正吾を、時市が見ている。

時市「……」

征四郎「正吾を連れて来た事、まだお気になさつておられるのですか？」

時市「いや……」

征四郎「子供子供とお思いなさいますな。時市様が初めて戦にお出になったのは、おいくつの時にございます？」

時市「一四だ」

征四郎「笑つて」やはり。あの正吾より若いではありませんか」

時市「……征四郎」

征四郎「はい？」

時市「わしは思うのだが……。間もなく生まれて来る我が子は、今、由比の腹の中で眠っている。外の事など何も知らず、ただ安らかにだ。それがもし、今のこの世の有様を知ったとして、それでもなお、あの子は生まれて来たいと望むであろうか。戦に明け暮れ、子供までもが競つて人を殺めるこんな世に……」

征四郎「……」

突然、後方から一騎の騎馬武者が走つて来る。

征四郎「(小声) 時市様」

時市と征四郎、さり気なく顔を伏せる。

騎馬武者、驚いて逃げる通行人たちの間を走り去る。

征四郎「八雲の早馬にございます」

時市「(険しい顔でうなづく)」

騎馬を避けた正吾、ぬかるみに踏み込んでいる。

正吾「くそつ。あの騎馬侍、手始めに素っ首取つてやれば良かった——」

正吾、ハッとすする。

サキが道端にしゃがみ、騎馬に驚いて泣き出した幼い子をあやしている。

初めて見るサキの笑顔。

正吾「思わず見とれる」……」

孫蔵、げげんな顔で、

孫蔵「どうした、小僧？ あのサキがどうかしたか？」

正吾「赤面して」な、何だ。何でもないわ」

正吾、足早に歩き出す。

## ○ 日崎城・大手門

門の外、田園地帯で包囲を続ける八雲の大軍。

城の守りに就く御子柴兵たちには疲労の色が濃い。

矢倉の上に立っている宿老・守重と侍大将・憲長。

田園地帯の向こうに見える山の中から、火事の煙が立ち昇っている。

憲長「(見て) 行瀬川筋の百姓たちの籠る谷にございます」

守重「(悔しい)……」

使番がやって来る。

使番「申し上げます」

守重「何じゃ」

使番「佐倉の乾様、御回復なされ、ただ今お目を覚まされましてございます」

## ○ 山中の道①

小高い山の尾根。

森の中の道を、木箱などを満載した一〇台ほどの荷車が進む。

荷車を押すのは大勢の百姓らしき男たちで、数人の八雲兵が監

視のために同行している。

木陰に隠れて見ている時市たち五人。

サキ「(指さし、小声で) あれだ。随分広くなってるが、あれが入江に下りて

く道だ」

やって来た荷車隊、サキの示す脇道へと曲がって行く。

時市たち、隠れたまま走り出す。

## ○ 山中の道②

脇道を行く荷車隊、最後尾の一台が遅れ始めている。

その荷車を押すのは四人の百姓男。

一人の八雲兵が、彼らを槍の柄で叩いて、

八雲兵「押せ！ 急がんか！」

その前方、道の上に張り出した木の枝に正吾がいる。

正吾、間合いを計り、大きな石を落とす。

石に車輪が乗り上げ、荷車はふらついて道の脇の茂みに突っ込む。

前に行く他の荷車、どんどん遠ざかって行く。

八雲兵、百姓男たちを叩いて、

八雲兵「この役立たずども！ 早く戻さんか！」

木陰から時市が飛び出し、八雲兵の首筋を打って気絶させる。

続いて出て来る征四郎と孫蔵、木から飛び降りる正吾。

怯える百姓男たち。

時市「案ずるな、何もせん。ただ、着ている物を我らと取り替えてはくれぬか」

四人の百姓男、戸惑うが着物を脱ぎ始める。

近くに来ていたサキに、

時市「サキ。お前はもうここまでで良い。苦労だった。これは少ないが取っておけ」

時市、サキに銭貨を渡す。

時市「この先は何が起こるか分からん。さあ、早く行け」

サキ「……」

時市「どうした？」

サキ、何かためらっていたが、乱暴に頭を下げると歩き出す。

見ていた正吾、とっさに、

正吾「おい！」

サキ「？」

正吾、思わず呼び止めたが言葉が続かず、

正吾「……何だ。さっさと行け。誰もお前など呼んどうらんわ」

サキ「(げげんな顔)」

サキ、歩き出し、木々の間に消えて行く。

正吾「……」

## ○ 日崎城・主御殿の二室

当主・克信と守重が入って来る。

克信「乾殿」

忠春「これは、御屋形様……」

全身に治療跡のある佐倉家の船大将・忠春、寝床から起きようとして、苦痛に顔を歪める。

克信「乾殿、構わん。そのままが良い」

忠春「(苦しい息で)は、申し訳ございませんぬ」

克信、控えている看護の者に、

克信「どうだ」

看護の者「はっ。熱も下がられ、もう御心配は無用かと存じます」

忠春「恐れながら御屋形様。それがし、急ぎ申し上げねばならぬ事が」

克信「八雲の砦と国崩しの事であろう。安心されよ。覚えてはおられぬであろうが、その事ならもう伺った。すでに昨夜、森上時市が、国崩し破壊のために鹿辺の瀬戸へと出立しておる」

忠春「鹿辺の瀬戸に……。御屋形様、それは違います」

守重「違う？ 違うとはどういう事じゃ？」

忠春、恐怖の表情。

忠春「あれは、ただの砦ではないのでございます……。あれは……」

### ○ 山中の道③

森の中に長い柵が築かれ、大勢の八雲兵がその周辺の番をしている。

やって来た荷車隊、一台ずつ番兵の確認を受け、柵の中に入っていく。

百姓男の着物に着替えて荷車を押して来た時市たち四人、どうにか間に合い、前の荷車に続いて柵に差し掛かる。

二人の番兵が荷車を止めさせ、確認して、

番兵A「この車が最後だな？」

時市「(うなずく)」

番兵A「遅れている。早く持って行け」

柵の中に入ろうとする時市たち。

番兵A「待て。——殿(しんがり)の兵はどうした？ 列の一番後ろにも、お前たちを見張る者がいたはずだな？」

時市「……！」

番兵A「何だ、なぜ黙っている？ 殿の兵はどうした？」

時市「……」

番兵A「お前たち、その車を離れる。早くせい！」

二人の番兵、槍を突き付ける。

他の番兵たちも集まり、取り囲まれる時市たち。

番兵の一人が、ふと時市の顔を覗き込んで、

番兵B「ん？ お前は……」

八雲兵「や、すまん、すまん」

と、一人の八雲兵が後ろから荷車に追いついて来る。

八雲兵「番兵たちに）今、腹がゴロゴロと催して、向こうの木陰に小山を築いておったところだな。いやあ、もう出る事出る事」

それは（先程気絶させた）八雲兵の具足を着けた征四郎である。

げん顔の番兵たちに、

征四郎「ん、何じゃ？ こいつら（時市たち）か？ こいつらも先程、俺と同じ物を食ってな。野辺の地蔵の供え物じゃが、それで口もきけずに堪えておるんじやろう。早く通してやらんと、ここにも小山が四つ——  
（自分の手を見て）あつ、ついとる」

征四郎、手を番兵たちに差し出して、

征四郎「のう、お前ら。何でもいいや、何か拭く物——」

番兵B「よ、寄るな！」

番兵A「分かった！ よう分かったから、早くこいつらの尻を叩いて——いや、尻は叩かず早く連れて行け！」

征四郎「ん」

征四郎がうながすふりをし、柵を通過して行く時市たち。

荷車を押す四人は、時市と孫蔵と正吾、そしてサキである。

時市「（小声）すまん、サキ」

サキ「首を横に振る」

正吾、サキを盗み見ている。

征四郎「目で示して）時市様、あれを」

前方の下り斜面の向こう。

そこは山に囲まれた谷間になっており、木々の向こうに天守らしき建造物の屋根の部分が見えている。

時市「……！」

荷車が進むにつれて視界が開け、その二層の天守は、黒い大きな方形の土台に乗っていることが分かってくる。  
孫蔵、荷車の木箱を覗き込んでいる。

木箱の中身は、大量の鉄の球（直径約一〇センチ）で、それぞれに布で塞いだ小さな穴が開いている。

時市にもそれを見せて、

孫蔵「国崩しの玉、この（穴の）中に火薬が入っております。おそらく、これが破裂する玉かと」

時市「うなずく」

征四郎と正吾が、小声で何か言い争っている。

時市「どうした、征四郎」

征四郎「いえ、この正吾が馬鹿な事を。あの天守が、先程から少し揺れていると申すのですが……」

時市「ん？」

一気に視界が開ける。

そこは、山に囲い込まれた大きな入江。

先程から見えていた建造物は、その入江に浮かぶ巨大な船である。

時市たち「驚き」

その黒い船の全長は約五〇メートル。

甲板上ほぼいっぱいに二階建の矢倉（方形の土台）が築かれ、

その上には二層の天守が乗っている。

矢倉の下部から突き出された大櫓は、片舷だけで三〇本。

そして、矢倉の壁面には片舷五つの砲門が並び、その中からは

大砲の筒先が突き出されている。

征四郎「思わず」これは、化け物……」

## ○ 日崎城・主御殿の一室

守重「驚き」鉄を張った船？」

寝床の忠春、苦しい息で、

忠春「延べた鉄で船体を覆った大安宅船。あれは船というより、もはや水に

浮かぶ砦にございます。昨年、尾張の織田が同様の物を造り、摂津石

山本願寺との海戦にて使用したと聞きます。鉄張りゆえに火矢も鉄砲

も通さず、積み込んだ国崩しの凄まじき威力をもって、本願寺方の毛

利水軍数百隻を壊滅させた……」

守重「愕然」……」

克信「では乾殿。八雲はその鉄張り船を望む所に動かし、海の上から国崩し

を撃ち掛けられるという事だな？」

忠春「は」

克信「うむ……」

部屋から縁側に出た克信、外を見る。

克信「この城の構え、此度ばかりは仇となつたかも知れんな」

克信の眼前には、日崎城の三方を囲む海が広がっている。

## ○ 入江・全景

人の手が加えられ、秘密の軍港になっている入江の中。

黒い巨船（以下「鉄船」）は、大きな栈橋に係留されている。

大勢の八雲兵と使役の領民たちが慌しく動き回る。

## ○ 同・栈橋

目の前には、壁のような鉄張りの船腹。

百姓たちに混じり、時市、孫蔵、正吾、サキが、荷車から荷物を降ろしている。

監視する番兵たち。

具足を着けたままの征四郎が来て、さり気なく時市に、

征四郎「（小声）やはりこの船、我が城に向かうようです。こんな物に海から攻められます……」

見回すが、鉄船の周囲や船上は八雲の将兵でいっぱいである。

時市「（小声）孫蔵」

と、時市、外の海に繋がる入江の出口を目で示す。

そこは、左右を高い崖に挟まれた、かろうじて鉄船が通れる程度の幅の水路。

片側の崖の上部では、大きな岩が水路の上に張り出している。

時市「あの岩に火薬を仕掛け、この船が下を通る時に崩し落とす。出来るか？」

孫蔵「しかし、火薬は城を出ます時に全て……」

時市、先程見た鉄球（以下「炸裂弾」）の木箱を示す。

鉄船の矢倉の上で、船大将・柚木満久（52）が入江全体に向かい、

満久「（叫ぶ）間もなく潮が満ちる！ 出船じゃ！ 急げ！」

時市、木箱をわざと引つ繰り返す。

転がり出る沢山の炸裂弾。

番兵「そこ、何をしている！ さっさと拾え！」

時市「へ、へい」

時市、拾いながら、炸裂弾を一つ懐に入れる。

孫蔵、正吾、サキもそれにならう。

### ○ 同・兵具倉の前

兵たちの動きが一段と慌しくなっている。

入江の隅に建つ小屋の中から、鉄砲の束を持った八雲兵が出て来る。

遠くにいる組頭が、

組頭「こつちだ、早く！」

八雲兵「はっ」

走り去る八雲兵。

近くにいた征四郎、さり気なく小屋に入る。

### ○ 同・出口外の岩場

崖に挟まれた入江の出口、外の海に面した岩場。

切り立った崖（上部の岩の張り出した側）を、腰に縄を巻いた

正吾が登って行く。

その下では、時市、孫蔵、サキが四つの炸裂弾を見ている。

孫蔵、穴を塞ぐ布を外し、中から粉状の火薬を少し出して見て、

孫蔵「良い火薬にございます。しかし、これのみで足りますかどうかは……」

時市「分かった。先に行っている」

時市、入江の中へと戻って行く。

崖の上の林に着いた正吾が、木に結んだ縄の先を下へと投げる。

下りて来た縄を見た孫蔵、炸裂弾を懐に入れようとするが、

サキ「待て、俺が持つてく」

孫蔵「ん？」

サキ「爺様、これ（火薬）を仕掛ける所探すんだろ？ 早く行け。懐がふく  
れてちや登り辛い」

孫蔵「うむ。では」

と、縄に手を掛けて、

孫蔵「（ため息）やれやれ。また縄かよ」

孫蔵、不器用に崖を登り始める。

## ○ 同・兵具倉の中

一人で棚を物色している征四郎。

物音に身構えるが、入って来たのは時市で、

征四郎「時市様」

時市「どうだ？」

征四郎「何もございません。この通り、火縄だけは見つかったのですが」

征四郎、長い火縄（導火線）を見せる。

時市「船はもう、兵の乗り込みも済んだようだ。やむを得ん。孫蔵には、あの玉のみでやらせるしかない」

## ○ 同・崖の上

水路の上に張り出した岩の上。

孫蔵と正吾が、岩の割れ目を調べている。

正吾「これは？」

孫蔵「ちいと浅い」

正吾「これは？」

孫蔵「もっと（張り出しの）付け根じゃ」

正吾「あせって」おい、早くやらんと、あれ来ちまうぞ」

眼下には、栈橋の鉄船が見えている。

孫蔵、一つの割れ目に目をつけ、

孫蔵「（自信なく）まあ、こんなところか……」

山側の林の中から、時市が出て来る。

時市「孫蔵、どうだ？」

孫蔵「はっ。あとは、やってみません事には何とも……」

時市「頼むぞ。全てはお前に懸かっているのだ」

と、時市、懐から四つの炸裂弾を出して孫蔵に渡す。

林から征四郎が出て来る。

時市「征四郎、ここだ。火縄を孫蔵に——」

正吾「おい、ちと待て。サキはどうした？ 征四郎、お主、サキを下におい

て来たのか？」

征四郎「戸惑い（い）や？」

孫蔵「あの娘なら、これ（炸裂弾）を持って、わしの後から登って来ると——」

と、炸裂弾を見た孫蔵、ハッとす。

時市「わしが征四郎と戻った時、下には誰もいなかった。縄の下に、その玉が置いてあるだけだったが」

孫蔵「やられ申した……」

時市「ん？」

孫蔵「抜かれておる。玉の火薬が抜かれておる」

孫蔵、炸裂弾の穴を下に向けてみせて、

孫蔵「ほれ、この通り全てじゃ」

時市たち、愕然。

その時、林の中から八雲の鉄砲隊が走り出て来る。

時市たち「！」

鉄砲隊、張り出した岩の付け根を塞いで並ぶ。

時市たち、逃げ道がない。

鉄砲隊の後ろから、数人の家臣を連れた八雲家当主・貞道が出て来る。

息を飲む時市たち。

貞道「森上時市。——ようやく会えたな。お前が城を抜けたのを見、先にここに来て待っていた」

時市「……」

孫蔵と正吾、時市と征四郎の背後に隠れて怯えている。

正吾「(あれは)誰だ？」

孫蔵「八雲家当主・八雲能地守貞道」

貞道、時市と真つ直ぐ向き合って、

貞道「時市、わしと立ち合え。この者ども(家臣たち)は手出しはせん」  
そう言つて貞道、刀を抜く。

征四郎「時市様」

征四郎、時市に具足の刀を渡す。

貞道「今度の戦、家臣たちにも異を唱える者が多い。御子柴など攻めるに値せずとな。だから今、ここでわしを斬れば戦は終わる。——さあ、来い時市。その刀でわしを斬れ」

時市「……」

刀を抜かず、動かない時市。

正吾、ふと下方の鉄船に目を留める。

出港準備が済んだらしく、人けのなくなった船首甲板に一人だ

け誰かがいる。

サキである。

正吾「！」

サキも、崖の上の正吾に気付く。

サキ「……」

正吾「(サキを見つめて)……」

サキ、鉄船の矢倉の中に入って行く。

無意識に追おうとし、崖の縁に近づく正吾。

孫蔵「(気付いて)小僧？」

孫蔵、慌てて止めようとするが足元が崩れ、二人一緒に崖から落ちる。

征四郎「孫蔵！ 正吾！」

孫蔵と正吾、入江の出口近くの海中に落下し、そのまま浮かんで来ない。

それを呆然と見ていた征四郎、時市の方に目を戻す。

貞道と対峙していた時市、刀を足元に捨てる。

征四郎「(驚き) 時市様？」

貞道、自分の刀を収める。

貞道「(時市に) 相変わらず甘いな。ならば、わしが自ら手を下すまでもない。  
(鉄砲隊の組頭に) やれ」

組頭「はっ」

貞道、家臣たちと林の中に去って行く。

組頭「狙え」

銃口が、時市と征四郎に向けられる。

征四郎「時市様、なぜ……」

時市「すまん……」

征四郎「……」

## ○ 同・出口外の海

入江の中からは見えない海面に浮かび上がる正吾と孫蔵。  
ぐったりした孫蔵を支えて泳ぎ、

正吾「おい、爺様。しっかり——」

組頭の声「放て！」

崖の上で多数の銃声が響く。

正 吾「！」

○ 日崎城・時市の家・内

由 比「！」

部屋で鉄砲の玉を作っていた由比、臨月の腹を押さえて体を折る。

一緒にいた侍女・セツが、

セツ「由比様？」

由 比「痛みを耐えて」——

セツ「お生まれになるのですね？ お堪え下さい。今、床を延べます」

セツ、急いで立ち上がる。

○ 入江・出口外の海

太鼓の音が響き、入江の中から鉄船が巨大な姿を現す。

○ 鉄船・櫓部屋

矢倉の一階、船体の横に張り出した部分にある部屋（同様の櫓部屋が両舷にある）。

床に設けられた穴から、三〇本の大櫓が海面に向けて突き出されている。

一本の大櫓に二人ずつついた水手（漕ぎ手）は皆、百姓らしき男たちである。

監督する八雲兵、水手たちを棒で叩いて、

監督兵「遅れとるぞ！ 太鼓に合わせ調子を取れ！」

水手たち、聞こえる太鼓の音に合わせて必死に櫓を漕ぐ。

○ 同・矢倉の上

二階建の矢倉の屋上に当たる場所。

大勢の操船の兵たちがおり、その一人が（先程からの）太鼓を叩いている。

船大将・満久が貞道に、

満 久「これより帆を持ちます。櫓を漕ぐ水手（かこ）どもが不慣れではございませぬが、明日の朝、夜明けより間もなく御子柴の城に着けるかと存じます」

貞道「うむ」

### ○入江・出口外の岩場

帆を上げた鉄船が海上を遠ざかる（船体が重いため速度は遅い）。  
岩場の陰から見ている孫蔵と正吾。

孫蔵「力なく）ああ、行ってしまいいよった……」

正吾「……」

孫蔵「わしはもう、何もかも嫌になった。戦も御子柴ももう知らん。このまま、どこぞの村に流れて米でも作って暮らすわ。……小僧、お前どうする？」

正吾「……」

孫蔵「何じゃ、そう落ち込むな。お前も一緒に行くか？」

正吾「……俺、あの船を追う」

孫蔵「何？」

正吾「俺、追っ掛けて、あの船に行く」

孫蔵「（呆れて）お前、まだ言っとるのか。あれに斬り込んで、貞道の首でも取るつもりか？ 諦めろ、もう終わったんじゃ。一国一城の主なんてな、しよせんは若き日の夢また夢——」

正吾「そんなんじゃねえ」

孫蔵「ん？」

正吾「言っただろう、あの船にサキが乗ったと。俺はサキに聞きてえんだ。なぜ俺たちにあんな事したのか」

孫蔵「なぜって、そりや、あの貞道の手の者じゃったからに決まっておろうが」

正吾「違う。——俺には分かる。サキはそんな奴じゃねえ」

孫蔵「分かるってな、あの娘はわしらをこの入江に誘い込み、国崩しの玉の火薬を抜いたのじゃぞ？ 他にどんな訳があると言うのじゃ？ ん？ 森上様と征四郎様もお気の毒にな。あの娘の見事な芝居に騙され、哀れこんな所で御討死とは——」

正吾「違う！」

孫蔵「（驚いて）……」

正吾は鉄船をじっと見ている。

正吾「俺は見た。ここに来る道で、早馬に驚いて泣く子をサキがあやしとつたところ。あのサキの笑い顔……。あんな優しい顔で笑う女が、人を

騙すような真似をするはずがねえ」

孫蔵「(正吾の顔をしげしげと見て) 小僧……。お前、分かるってそれですか？」

優しい顔で笑うから、あの娘は悪人ではないと申すのか？」

正吾「(うなずく)」

孫蔵「それで、それを確かめに……。あの娘に会いにあの船に行くか？」

正吾「(うなずく)」

孫蔵「お前、分かっているか？ もしも行けたとしても、生きて帰れるかど

うか分からんのじゃぞ？」

正吾「(決意の表情でうなずく)」

孫蔵「……」

### ○ 小さな漁港 (夕方)

漁から帰った漁師たちが、岸で網の手入れをしている。

その一人が、ふと気付いて、

漁師「あつ、船泥棒！」

一艘の小舟に飛び乗った正吾と孫蔵、止めようとする漁師たちをかわして岸を離れる。

正吾、全力で櫓を漕いで、

正吾「爺様、なぜついて来る？」

孫蔵「大人がついておらんと、お前のような子供は危なっかしくてならん。

だが、危なくなったら、わしはさっさと逃げるからな」

小舟、沖に出て行く。

### ○ 海 (夜)

月明かりの海を鉄船が行く。

### ○ 鉄船・船首甲板 (夜)

矢倉から出て来た満久が、甲板にいる貞道に歩み寄る。

満久「御屋形様。御指図通りあの者ども、天守に移しましてございます」

貞道「(うなずく)」

満久、貞道の顔色を窺いながら、

満久「あの……。御屋形様、恐れながらお伺いいたします。なぜにございまし

ようか？ なぜあの二人すぐには殺さず、ああした、いたぶりますよ

うな御沙汰を……」

○ 同・天守の一階(夜)

時市と征四郎(具足は着けていない)が、座った姿勢で柱に縛られている。

他には誰もいない。

時市が、ぼつりと口を開く。

時市「征四郎、お前に黙っていた事がある……。お前、わしが以前、八雲の家臣であった事は知っているな？」

征四郎「はい。今日入江の番卒が、お顔を見知っておるようだったのは、そのためでございますよう？　——五年前、私がお仕えするようになる前ですが、時市様は御屋形様にお目を掛けられ、御屋形様の御三女・由比様の婿として御子柴に参られたのだと」

時市「うなずいて……実はな、征四郎。わしとあの貞道とは、八雲の家で、幼い頃からの友だったのだ」

征四郎「驚き」何と……」

時市「貞道は八雲家当主の一門で、わしは譜代の家老の息子。立場に違いはあったが歳も近く、わしら二人はまるで実の兄弟のように育った……」

○ 「五年前」ある邸宅の庭

木太刀を構えて向き合う時市(8)と貞道(9)。

大人たちが温かく見守る。

打ち合って剣の稽古をする二人、勢い余って植え込みに倒れ、葉まみれになった互いを見て笑う。

○ 「二六年前」草原

馬を並べて走る時市(17)と貞道(18)。

馬を止めた二人、草の中に寝転び、並んで空を見上げる。

○ 「五年前」八雲家当主の居館・外観(夜)

兵たちに囲まれ、燃え上がる居館。

現在の時市の声「今から五年前の事。まだ八雲にいたわしは、家中の志を同じくする者たちと計り、当時の当主・八雲貞秀様を討つべく兵を挙げた」

○ 「五年前」同・内(夜)

煙の漂う廊下を、具足姿の時市（28）と貞道（29）が走る。

現在の時市の声「領民に対する貞秀様の非道を見かね、貞秀様の甥である貞道を新たな当主としようとしたのだ」

寝所に入る時市と貞道。

そこには、自害した八雲貞秀（58）が倒れている。

時市と貞道、亡骸に手を合わせる。

現在の時市の声「その時わしは、貞秀様の祐筆を捕らえながらも見逃し、領外への脱出を助けた。貞道からは殺すよう命じられていたが、すでに貞秀様は御自害し我らの企ては成就。その者の命まで取る事はないと情けを掛けたのだ」

## ○ 「五年前」日崎城・主御殿の広間

多くの縁者や家臣が集まり、時市と由比（21）の祝言が挙げられている。

現在の時市の声「そして貞道は八雲家の当主となり、そのすぐ後、わしは由比の婿として御子柴の家に入った。これは無論、八雲と御子柴との盟約を新たにするためでもあったが、御屋形様はわしに、何より大事な末の娘を下さった……」

克信（56）、時市と由比を嬉しそうに見ている。

現在の時市の声「それからしばらくは何事もなく過ぎた。しかし一年後……」

## ○ 「四年前」八雲の城下町

男が刀を振るう。

血まみれで倒れる若い女と二人の幼い少年。

現在の時市の声「殺されたのは貞道の妻と二人の息子。それは、前当主・貞秀様の祐筆、かつてわしが殺さず領外に逃がした、糸川という男の仕業だった……」

懸命に妻の手を握る貞道。

貞道の妻、目を閉じて動かなくなる。

貞道、妻子の亡骸を前にして、

貞道「言葉にならない絶叫……」

## ○ 「四年前」日崎城・時市の家・内

現在の時市の声「貞道は直ちにわしを引き渡すよう求めて来たが、御屋形様は

これを頑として拒んだ」

時市と克信、由比がいる。

克信「妻と子を亡くされての貞道殿の乱心、目を覆うばかりと聞く。今、八雲に戻るは、ただ殺されに行くようなものだ」

時市「しかし、御屋形様——」

克信「お前がわしの元に参って一年。もはや御子柴の家は、お前なしでは立ちゆかん。それに何より、このお由比の事を考えてやってはくれんか。——この通りだ」

克信、頭を下げる。

辛そうにうつむいている由比。

時市「……」

### ○ 鉄船・天守の一階(夜)

時市、征四郎に語り続ける。

時市「それから四年。貞道はまるで人が変わってしまった。領民たちを虐げ、無謀としか言えぬ戦で領地を広げ……。此度の御子柴攻め、昨日お前も申していた通り、八雲の家としては何の利もないのだ。全てはただ、わしとわしを匿った御子柴の家に対する貞道の私怨がさせている事……」

征四郎「……」

時市、絞り出すように、

時市「征四郎、すまん……。わしがあの時、貞道の妻子が殺された時に八雲に戻り、貞道に討たれていたら……。いや、それより前、あの五年前に、わしがあの糸川を殺していたなら……」

### ○ 同・船首甲板(夜)

船の舳先に、一人きりで立っている貞道。

夜の海をじっと見つめている。

### ○ 同・天守の一階(夜)

語り終えた時市、懸命に感情を抑えている。

征四郎、その時市に言葉もなく、

征四郎「……」

○ 日崎城・時市の家・内(夜)

陣痛の合間、疲れて眠っている由比。  
その額の汗を拭くセツ、ふと外を見る。  
日崎城を囲む海、水平線が微かに明るくなり始めている。

○ 海(朝)

朝日が昇る海を進む鉄船。  
その前方に、関船と小早(矢倉のない小型軍船・全長約一〇メートル)からなる約三〇隻の船団がいる。  
船団、陣を組んで鉄船に向かって来る。

○ 鉄船・矢倉の上(朝)

貞道と満久が船団を見ている。  
満久「佐倉の者どもにごさいます。此度は軍船(いくさぶね)を揃え、この船に一矢報いるつもりなのでございましょう」  
貞道「蹴散らせ。ただし、国崩しは使わず残しておけ」  
満久「はっ。もとより、あのような雑魚ども、国崩しを使うまでもございません」

鉦が鳴り、帆が下ろされる。  
早い調子で打たれる太鼓。

○ 同・天守の一階(朝)

柱に縛られたままの時市と征四郎。  
窓の外を、戦闘準備の兵たちが行き交う。  
(天守は、広い矢倉の上、中央部に建っている)

○ 同・矢倉の中(朝)

弓や鉄砲を持った兵たちが通路を走り、壁に無数に設けられた狭間で配置に就く。

○ 同・櫓部屋(朝)

速い調子の太鼓が響く。  
監督兵、疲れ切っている水手たちを棒で打って、  
監督兵「遅い！ 早櫓だ、調子取れ！」

○ 海戦（朝）

接近する鉄船と佐倉の船団。  
巨大な鉄船の前では、関船も小型船にしか見えない。  
船団、鉄砲を撃ち火矢を放つが、鉄張りの船体に全て弾き返されてしまう。  
逆に、鉄船の高い矢倉からの攻撃は、関船や小早の兵たちを容赦なく倒してゆく。

○ 小舟（朝）

正吾と孫蔵の小舟が、海戦の行われている場所へと向かって行く。  
櫓を漕ぐ正吾に、

孫蔵「（慌てて）おい、降ろせ、小僧！ わしはさつさと逃げると申したじやろうが！」

正吾「この機は逃せん。あのださくさに紛れて、あれ（鉄船）に後ろから近づく！」

○ 海戦（朝）

佐倉兵たち、かろうじて小早を接舷させ、鉄船に乗り移ろうとする。  
しかし鉄張りの船体は滑り、縄梯子の鉤爪を掛けることも出来ない。  
船上から矢が射掛けられる。  
戦力の差は圧倒的、船団は壊滅状態である。

○ 小舟（朝）

鉄船に後方から近付いて行く小舟。  
すでに戦鬨の音は散発的になり、周囲には多くの船の残骸が漂っているだけ。

正吾「くそっ、終わっちゃまった……」

正吾、何か考えて、

正吾「爺様、死ね」

孫蔵「ん？」

正 吾「いいから、ほれ。早く死ね！」

### ○ 鉄船・矢倉の上(朝)

満久、周囲の海を見回して、

満久「よし、それまでじゃ」

鉦が鳴らされ、兵たちが戦闘態勢を解く。

満久「御屋形様。いかがにございましょう、この鉄船の威力は？」

貞道「満足して」うむ」

船尾側にいた一人の兵、狭間から引き上げようとしてふと気付く。

壊れて漂う多くの船の中に、一艘だけ不自然な動きでこちらに向かって来る小舟がある。

八雲兵「？」

その小舟の上には、矢が刺さって死んだふりをしている正吾と孫蔵。

八雲兵、げげんな顔で見っていたが、興味をなくして目をそらす。腕だけ動かして櫓を漕ぐ正吾。

八雲兵、やはり気になって目を戻す。

小舟は空になっている。

八雲兵「首をかしげて）……？」

### ○ 同・船尾部分(朝)

船腹のすぐ脇、船の上からは見えない海面。

潜って来た正吾と孫蔵が浮かび上がり、銚(小舟にあった物)を喫水線下の鉄張りのない部分に刺して掴まる。

孫蔵「大きく息を吸って）お前とおると、こんな事ばかりじゃ」

正吾「で、爺様。こんな所まで来てどうする？」

孫蔵「呆れて）どうするってな、わしは無理やりお前に連れられて……。いや、そうじゃな。どうせここまで来たんじゃ。ついでに、ひとつ大手柄でも立てて帰るとするか。——で、小僧、お前こそどうする？あの娘、お前の申す通り悪人でなかったら、嫁になってくれとでも頼むか？」

正吾「(赤面して)ば、馬鹿言え。そんなんじゃねえ。俺は——」

孫蔵「おい！」

前方に、日崎城のある岬が見えてきている。

孫蔵「慌てて」いかん、大変じゃ。急げ、小僧。これ、どうやって登るんじや？」

数メートル上の矢倉まで、反り返った船腹には何の手掛かりもない。

正吾「そうあせるな、爺様。ちと待ってりや、（鉄船の）奴らの方から道をつけてくれる」

孫蔵「何？」

### ○ 日崎城・天守・最上階（朝）

守重のいる窓辺に、克信がやって来る。

克信「守重、どこだ？」

守重「外を指して」あれにございます」

朝日に輝く海、遠くから黒い巨船が近付いて来る。

克信「驚き」あれが……」

守重、控えていた使番に、

守重「皆を至急ここに集めよ」

使番「はっ」

鉄船を見ている克信。

克信「つぶやく」時市、及ばなかったか……」

### ○ 鉄船・天守の一階

時市と征四郎の所に、貞道が二人の兵を連れて入って来る。

兵たち、征四郎を縛る縄を切る。

戸惑う征四郎。

貞道「杉江征四郎と申したか。哀れだな。（時市を示し）敵の総大将を前にして刀を捨てる。こんな腑抜けた主に仕えて、お前も誠に不運な事よ」

征四郎「……」

貞道「わしはお前を殺したくはない。お前も、このような男（時市）に殉ずるは不本意であろう。——どうだ征四郎。もしも、これからわしの申す通りにしてくれたなら、この貞道、誓ってお前一人の命は助けてやる」

### ○ 日崎城・曲輪の端

眼前の海、やって来た鉄船が、岬から一〇〇メートルほどの所で櫓を止める。  
大勢の御子柴兵たちが、不安そうに鉄船を見ている。

### ○ 鉄船・船首部分

船首甲板から兵たちが錨を下ろす（鉄船は、日崎城に側面を向けて停泊する）。

船尾の方から、船腹（城からは見えない側）伝いに泳いで来た

正吾と孫蔵。

正吾、甲板から下がった錨の綱を示して、

正吾「（小声）な？」

孫蔵「（また綱か、とため息）」

綱を伝い上った正吾、船縁からそっと顔を出して覗く。

すぐ後ろから矢倉が建ち、三メートルほどの長さしかない船首

甲板。

一人の兵がおり、矢倉の入口で見張りに立っている。

顔を引っ込めた正吾、ふと上を見て、

正吾「（驚き）！」

矢倉の上の帆柱に、征四郎が縛りつけられている。

### ○ 日崎城・天守・最上階

窓辺に、克信と守重の他、憲長ら重臣たちも集まっている。

鉄船の帆柱、こちらを向いて縛られている征四郎を見て、

守重「（驚き）あの者、時市に同行いたしました杉江征四郎……」

克信「（険しい顔でうなずく）」

### ○ 鉄船・天守の一階

船首側の窓の外に、縛られ、二人の兵に槍を向けられた征四郎が見える。

貞道、時市に冷たく笑って、

貞道「さて。あの者、何と言うかな」

時市「……！」

猿ぐつわをされた時市、もがくが縄は解けない。

○ 同・矢倉の上

帆柱の横に満久が立ち、日崎城に向かって叫ぶ。

満久「御子柴の者ども、聞け！ 昨夜お前たちの城を出た森上真兵衛時市、八雲領に入ると、そのまま我らに降伏して参った！ 此度の戦、御子柴の負けは必定！ そこで幼き頃よりの友、我が御屋形様のお情けにすぎり、八雲への寝返りを申し出て参ったのじゃ！」

○ 日崎城・各所

皆が満久の声を聞いている。

天守最上階で、克信と重臣たちが。

時市の家の庭で、セツが。

満久の声「時市は今、我が城下にて御屋形様の御沙汰を待っておる！ 生まれ育った国に帰り、時市もさぞ心安かろう！ 音に聞こえた森上時市、その正体とはそんなものじゃ！ それを家中一の侍と仰ぎ、頼みにしておったお前たち御子柴も、たかが知れたもの！」

大手門で、八雲の大軍と向き合う兵たちに動揺が広がる。

御子柴兵「(不安) 森上様が……？」

○ 鉄船・矢倉の上

満久「もつとも時市の事、このわしが申すだけでは信じがたかろう！ そこ  
でこれより、時市の従者、お前たちがよく知るこの者の口より証を立  
てさせる！ 聞くのじゃ！」

そう言つて満久、征四郎を示す。

黙っている征四郎。

征四郎「……」

満久「(小声) どうした？ その通りだと早く申せ。お前とて、こんな所で死  
にたくはあるまい」

二人の兵が、征四郎に槍を突き付ける。

征四郎「……」

征四郎、天守の時市の方を見る。

○ 同・天守の一階

時市、征四郎を見つめる。

時市「うながすように、うなづく」

○ 同・矢倉の上

征四郎、時市を見ていたが、

征四郎「……御免」

日崎城を向いた征四郎、叫ぶ。

征四郎「杉江征四郎尚允、恐れながら申し上げます！ これより申す事に嘘偽りはございません！——我が主・森上時市はこの船にて健在！憎き敵総大将・八雲貞道を討つべく機を窺っております！」

○ 同・天守の一階

時市「——！」

○ 同・矢倉の上

征四郎「(叫ぶ) 城の兵たち、案ずるな！ 八雲貞道、我らが城の堅固なるを恐れ、この船に逃げ込んで震えておる！ 此度の戦、八雲には異唱える者多く、敵勢の士気極めて低い！ この船も、ただの張子の虎だ！」

満久、戸惑って貞道を見る。

○ 同・天守の一階

貞道「(満久にうなづく)」

○ 同・矢倉の上

征四郎「目に物見せてやれ！ 我ら御子柴が一丸となれば八雲の腰抜けの一万や二万、何という事はないわ！」

二人の兵、槍で征四郎の胸を突く。

○ 同・天守の一階

時市「！」

○ 日崎城・各所

息を飲む克信と重臣たち、セツ、そして大勢の御子柴兵たち。

○ 鉄船・船首部分

正吾「……！」

正吾、錨の綱に掴まったまま征四郎を見上げている。  
海中の孫蔵、状況が分からず、

孫蔵「(小声) おい、どうしたのじゃ？」

正吾「(呆然と) ……」

と、征四郎が正吾の方を向き、弱々しい顔の動きで天守を示す。  
正吾「察してうなずく」

征四郎、絶命する。

矢倉の上から満久が、船首甲板の見張り兵に、

満久「その者。そこはもう良い。この(征四郎の)骸を捨てる。上がって  
参れ」

見張り兵「はっ」

矢倉に入って行く見張り兵。

正吾、涙を拭い、素早く甲板に上がる。

### ○ 同・天守の一階

貞道、時市の猿ぐつわを外す。

時市「(怒り) 貞道……」

貞道「これより、この船から城に国崩しを撃ち掛ける。時を同じくして、陸  
の軍勢も一気に攻め込む手筈だ。今度はお前が、お前の大事な者たち  
が死んでゆくのをその目で見ている」

### ○ 日崎城・大手門の内側

足軽大將が、槍を突き上げて叫ぶ。

足軽大將「杉江征四郎の心意気、無駄にはすまいぞ！ えいえい！」

御子柴兵たち「応！」

足軽大將「えいえい！」

御子柴兵たち「(さらに大きく) 応！」

兵たちの不安は消え、皆が決意の表情である。

### ○ 同・天守の一階

城内の各所から、兵たちの鬨の声が聞こえて来る。

重臣たちと入って来た克信、立ったまま、

克信「国崩しに一万の敵。だが、わしは座して死を待つつもりはない。我ら  
誇りを懸け、最後の一兵となるまでこの城を守り抜く。皆、頼むぞ」

重臣たち「応！」

足早に持ち場に向かう憲長ら重臣たち。

守重「恐れながら御屋形様。この守重に、御側を離れ、大手門の守りに就き  
ます御許しを」

克信「よし。行け」

守重「はっ！」

守重、重臣たちの後を追う。

### ○ 同・時市の家・内

由比「ううっ！」

激しい陣痛に耐えている由比。

手伝いの女と共に付き添うセツに、

由比「(荒い息で)セツ……」

セツ「はい」

由比「先程、外で誰かが、時市様の名を叫んでいたような……」

セツ「いいえ、何も。きつと空耳にございましょう」

一人の御子柴兵が、部屋の外に来て、

御子柴兵「御免。間もなく戦が始まります。危のうございますので、御方様に

おかれましては、至急、天守に御避難なさいますよう——」

セツ「何を言うのです！ 何が戦ですか！ 見なさい。由比様は今、それど

ころではないのです！」

### ○ 鉄船・国崩し部屋

矢倉の二階にある部屋。

車台に乗った五門の大砲が並んでいる。

三人一組の兵たち、それぞれの大砲に炸裂弾を込め、壁の砲門

へと押して行く。

### ○ 同・矢倉の上

貞道と満久がいる。

満久「御屋形様。国崩しの用意整いましてございます」

日崎城を見据える貞道。

貞道「始めよ」

○ 同・国崩し部屋

組頭「一番より、放て！」

一番端の大砲の兵、点火。

轟音と共に、大砲が火を噴く。

○ 同・天守の一階

時市「！」

○ 海

鉄船の側面、矢倉から突き出された大砲の筒先が次々と火を噴く。

○ 日崎城・主御殿の一室

ヒュルヒュルと空気を裂く音が近付く。

怪我で横になっていた忠春が、

忠春「恐怖！」

○ 同・各所

飛来した炸裂弾が次々と落下、爆発する。

吹き飛ぶ兵糧倉、爆発に巻き込まれる兵たち、倒れる高井楼――

○ 同・天守・一階

克信「(驚愕)！」

○ 同・時市の家・内

すぐ近くで爆発、凄まじい衝撃に見舞われて、

由比「(悲鳴)！」

○ 同・大手門の内側

斉射の最後の一発(五発目)は、大手門のすぐ近くで爆発。

集合している御子柴兵たち、怯える。

指揮を執る守重、憲長に、

守重「憲長」

憲長「(兵たちに)何だ、そのざまは！ 杉江征四郎に笑われるぞ！ すぐに敵が来る、急ぎ位置に就け！」

### ○ 同・大手門の外

八雲の大軍が、密集隊形で大手門への坂を上って来る。突然門が開き、中から、燃える薪を満載した荷車が何台も押し出される。

八雲兵たち「！」

坂を下って迫る火車に、列を乱す八雲勢。

そこに、城塀の上に現れた御子柴兵たちが大量の鉄砲を撃ち掛ける。

守重「掛かれ！」

守重と憲長を先頭にした数十人の御子柴兵、門を出て八雲勢に斬り込む。

激しい乱戦。

### ○ 八雲の本陣・前

丘の上に立ち、戦いの模様を見ている八雲家副大将・恒幸。大手門の前、敵味方の兵が次々と倒れてゆく。

恒幸「……」

### ○ 鉄船・国崩し部屋

再装填の終わった五門の大砲が、砲門に押し出される。

組頭「一番より、放て！」

発射される大砲。

### ○ 日崎城・各所

再び五発の炸裂弾が飞来、爆発が起こる。

最上階を吹き飛ばされる天守、逃げ惑う女たち――

そして炸裂弾の一発が、大手門脇の城塀を破壊する。

### ○ 同・大手門の外

爆発で出来た城塀の大きな裂け目に、八雲兵たちが殺到して行く。

乱戦の中の守重たち、それを見て、

憲長「神事様、あれを防がねばなりません。ひとまず門内へ」  
守重「うなずく」

### ○ 鉄船・天守の一階

次々と大砲が撃たれ、窓の外に見える日崎城で爆発が起り火の手が上がる。

時市、あせるがどうすることも出来ない。

と、外で人の倒れる音。

続いて船尾側にある戸が開き、殴り倒した見張り兵をまたいで

正吾が中に入ってくる。

時市「(驚き) 正吾？」

正吾「しっ」

船首側の窓の外、矢倉の上で日崎城を見ている貞道と満久。

正吾、それを気にしながら時市の縄を解き始める。

時市「お前、なぜ？」

正吾「ちと、この船に用があつてな。あと、爺様も共に来とる。国崩しを潰

すと、もう年甲斐もない張り切りようだな」

縄を解き、そのまま出て行こうとする正吾に、

時市「征四郎の言う通りだったな」

正吾「？」

時市「お前を連れて来て良かった。礼を言う、正吾」

正吾「(照れ隠し) けっ。……(真顔になって) 仇、討ってくれよ」

時市「(うなずく)」

正吾、出て行く。

### ○ 同・矢倉二階の通路

誰もいない通路をそっと進む孫蔵。

近くの部屋から出て来た八雲兵たちに見つかって、

八雲兵「何だ、お前！」

孫蔵「あ、ああ、いや、わしはな——」

孫蔵、持っていた刀で抵抗するが、すぐに追いつめられる。

時市「待て！」

通路の向こうに立っている時市。

八雲兵「(驚き) 森上時市……!」

八雲兵たち、時市に殺到。

時市、兵の槍を奪い、一瞬にして全員を突き倒す。

目を見張る孫蔵に、

時市「行くぞ孫蔵。国崩しの所だな」

### ○ 同・天守の一階

柱の根元に、時市を縛っていた縄だけが落ちている。

それを見ている貞道と満久。

満久「(青ざめて) 御屋形様、申し訳ございません!」

貞道「……」

そこに、一人の兵が走って来て、

八雲兵「申し上げます! ただ今、左舷国崩し部屋、森上時市ら二名の者によ

り奪われましたでございます!」

満久「何じゃと!?!」

### ○ 日崎城・大手門の外

閉じた門の前に押し寄せる八雲の大軍。

巨大な破城槌が、何度も扉に打ち付けられる。

### ○ 同・大手門の内側

扉を懸命に押さえる御子柴兵たち。

爆発で出来た城塀の裂け目は、木材などで応急的に塞がれてい

るが、そこも外から大勢の敵兵に攻められている。

門扉に一際大きな衝撃があり、門が折れ始める。

憲長「神事様……」

守重、刀を抜き、門扉に向かって立つ。

兵たちも皆、それにならう。

と、大砲の発射音が聞こえ、空気を裂く音が近付いて来る。

憲長「国崩しだ、来るぞ!」

### ○ 同・大手門の外

飛来した最初の炸裂弾は、八雲勢の背後、大手門から遠く離れた何もない田んぼで爆発する。

八雲兵たち「？」

### ○ 八雲の本陣・前

眼下の田園地帯で二発目と三発目が爆発。

着弾は、次第に大手門に近付いている。

恒幸「見ていて——！」

### ○ 日崎城・大手門の外

残る二発の炸裂弾、大手門を囲む八雲勢の真中に落下、爆発する。

八雲兵たち「うわあああ！」

吹き飛ばされる大勢の兵たち。

### ○ 鉄船・国崩し部屋

八雲兵はおらず、時市と孫蔵がいる。

まだ煙の立つ大砲の横で、

孫蔵「得意げに）まあ、年の功じやな。使うは初めてでも、わしの知恵をもつてすればこの通りじや。森上様も仰せられましたように、こんな物、しよせんは大きな鉄砲——」

心張り棒をした入口の戸が、外から激しく叩かれる。

孫蔵「森上様、来りました」

### ○ 日崎城・大手門の外

門が内側から開き、御子柴の騎馬武者と歩兵数百人が突出する。  
守重、先頭を走る馬上で、

守重「行け！ 敵本陣まで一気に駆け抜けよ！」

御子柴勢、爆発で総崩れになった八雲兵たちを蹴散らしてゆく。

### ○ 鉄船・矢倉二階の通路

八雲兵たちが集まり、閉じた戸を破ろうとしている。

そこにやって来る貞道と満久。

満久「(必死) 急ぎ船を回し、右舷の国崩しを城に向けます。されば、これに  
(この部屋に) 籠る時市たち、もはや御味方に向かって撃つ事は——」

貞道「(兵たちに) 何をしている！ 早く開けよ！」

戸が破れる。

○ 同・国崩し部屋

破った戸から入って来た貞道たち、驚く。  
部屋の中にいたのは、時市一人だけである。

満久「もう一人は……もう一人はどうしたのじゃ!？」

一本の柱に縄が結ばれ、その先が砲門（約七〇センチ四方）の  
一つを通って外へと垂れている。

貞道「気付いて!」

○ 同・船底部

梁がむき出しになった暗い場所（船の最下層の床下に当たる場  
所）。

床に、炸裂弾の火薬が調整して盛られている。

仕掛けを終えた孫蔵、火縄に点火して物陰に隠れる。

短い火縄はすぐに燃え尽きて――

○ 同・国崩し部屋

轟音と、下から突き上げる衝撃。

貞道「!」

○ 同・船底部

床（船底）に開いた穴から大量の海水が噴き出し、広がって行  
く。

孫蔵、急いで上層に戻ろうとするが、

孫蔵「驚いて）サキ？ お前、サキじゃな!？」

大きな梁の陰に、サキがいる。

○ 同・国崩し部屋

「水が入った!」「沈むぞ、逃げろ!」など兵たちの叫びが聞こ  
えて来る。

満久、あたふたと貞道に、

満久「御屋形様、お逃げ下さい。この船、鉄張りゆえに重く、一度（ひとた  
び）水が入りましたらそれまでにございます。さあ、お急ぎを。御屋

形様——」

いら立った貞道、満久を斬る。

満久「——！」

満久、絶命。

貞道、憎しみの目を時市に向けて、

貞道「時市……」

時市「貞道、わしと立ち合え」

貞道「何？——（冷笑して）ほう。お前にこのわしが斬れると言うのか」

時市「斬る。昨日は友としてお前を斬れなかった。だが、今日は違う。——

今日、わしは今のわしとして、我が大事な者たちのためにお前を斬る」

## ○ 海

船体を傾かせ、沈んで行く鉄船。

すでに、船縁のすぐ下にまで水が迫っている。

慌てふためく八雲兵たちが、次々と海に飛び込む。

## ○ 鉄船・矢倉一階の通路

矢倉の出口に向かい、逃げて行く八雲兵たち。

その中に、正吾が驚きの顔で立っている。

正吾「……！」

サキが、こちらへと走って来る。

正吾「慌てて口ごもり）な、何だ、違うぞ。俺は、お前に会いに来た訳じゃ

——」

サキ、正吾には気付きもせず、近くの閉じた戸の前へ。

サキ「戸を叩いて）おい、誰かいるか？」

男の声「おる！開けてくれ。大勢閉じ込められとる！」

サキ、門を外し、重い戸を開ける。

戸の中は、六〇人の水手たちのいる櫓部屋。

通路に出て来た水手・辰二（４７）、サキを見て驚き、

辰二「サキか？」

サキ「辰二！茂吉はどうした？茂吉はどこだ！？」

辰二「（気おされて）あ、ああ、おる。茂吉、この中じゃ」

と、辰二、水手たちが次々と出て来ている戸を示す。

サキ、戸の中を覗こうとする。

それを見ていた正吾、訳が分からず、サキの後について来た孫蔵に、

正吾「おい、爺様。何だ、どういう事だ？」

孫蔵「うむ……。まあ、お前の申す通りじゃった。サキはな、決して八雲に通じておった訳ではない。その茂吉と申す男を追い掛け、それでこの船に乗ったんだそうじゃ」

正吾「茂吉？」

孫蔵「お前、聞いておったじやろう。八雲が、あのサキの村の男たちを連れて行ったと。それが、つまりこの者たち（辰二たち）じゃ。この船の櫓を漕がせるため、あの辺りの村から無理やりに集められたのじゃ」  
櫓部屋から次々と出て来る水手たち。

サキ、その一人一人の顔を覗き込んでいる。

孫蔵「サキは、村の男たちが、その茂吉が名越に連れて行かれたようじやと知り、案内を頼まれたを幸い、わしらについて参った。そしてあの入江で、この船に乗せられる茂吉を見掛け、居ても立ってもおられず己も後を追って忍び込んだと。お前が崖の上からサキを見たのは、その時だそうじゃ」

正吾「そんなら爺様、あの時サキが、あの国崩しの玉の火薬を抜いたのは……」

孫蔵「ああ。わしらがこの船を潰したら、乗っ取る茂吉まで潰れてしまうからな」

サキ「茂吉！」

櫓部屋の中を覗いたサキ、喜びに顔を輝かせる。

櫓の差された床の穴から浸水が始まっている室内。

最後に残り、怪我をした仲間を支えていた水手・茂吉（20）が、

茂吉「（驚き）サキ？ お前、何でここに？」

戸口まで来た茂吉、怪我人を外の仲間たちに引き渡す。

その茂吉を嬉しそうに見ているサキ。

正吾、孫蔵に、

正吾「サキを嬉しそうに見て）な、あの顔だ。あんないい顔で笑う女が悪人のはずあるまい？ ……で、爺様。あの茂吉ってのは何者だ？ 同じ村の男って、サキの兄か？ 親父……ではなさそうだな」

孫蔵「（言い辛い）うむ、だから、その……分かるじやろ？」

突然、船体に大きな揺れ。

櫓部屋の床の穴から一気に大量の海水が流入し、まだ室内にいた茂吉は足をすくわれて転倒、頭を打つ。

サキ「茂吉！」

動かない茂吉、櫓部屋の奥へと流される。

通路にも大量の水が流れ込んで来る。

サキ、櫓部屋に入ろうとするが辰二に止められる。

辰二「待て、サキ！ 危ない！」

サキ「離せ！」

正吾、そのサキに駆け寄って、

正吾「待つとれ。(茂吉を)連れて来てやる」

正吾、櫓部屋に入って行く。

孫蔵「驚いて)小僧? ——正吾！」

水流に押された戸が閉まる。

サキ「茂吉！」

サキ、開けようとするが、重い戸はびくともしない。

### ○ 同・櫓部屋

すでに腰の高さまで来ている水。

正吾、あお向けに漂う茂吉の所に行き、

正吾「おい、しっかりしろ！ 起きろ、茂吉！」

茂吉、うめくが目を覚まさない。

### ○ 同・矢倉一階の通路

水位を増す激流の中、開かない戸を押して、

サキ「茂吉！ 茂吉！」

辰二が、サキを戸から引き離す。

辰二「サキ、来い！ もう駄目じゃ、こつちまで死んじまう！」

サキ「嫌だ！ 離せ！」

必死にもがくサキ。

孫蔵が辰二に手を貸し、戻ろうとするサキを連れて矢倉の出口に向かう。

サキ「悲痛な叫び)茂吉！」

○ 同・櫓部屋

外から、茂吉を呼ぶサキの声が微かに聞こえる。戸が開かないと知った正吾、周囲を見回し、水に潜って櫓の穴の所へ。

櫓は、穴の縁に金具で繋がれている。

正吾、力を振り絞ってどうにか金具を壊し、櫓を外に押し出す。太い櫓がなくなった穴は、人が通り抜けられそうである。

苦しい息を堪えて正吾、すでに部屋の天井近くまで来ている水面に浮上。

正吾「(茂吉に) おい、行くぞ！ いつまで寝とる！」

正吾、目を覚まさない茂吉に、

正吾「俺はサキが好きだ！ あの女が大好きだ！ お前が死んじまうとサキが悲しむんだらう？ だから茂吉、起きろ！ サキを悲しませる奴は俺が許さん！」

○ 田園地帯

日崎城の前、田園地帯いっばいに繰り広げられる御子柴勢と八雲勢との戦い。

馬を下りて戦っていた守重、ふと周囲が静かになっていることに気付く。

守重「……？」

兵たちは敵も味方も皆、海の方を見ている。

矢倉の中程まで沈んだ鉄船。

その矢倉の上に、二人の男が向き合って立っている。

守重「(見て) 時市……」

○ 八雲の本陣・前

恒幸も鉄船を見ていて、

恒幸「御屋形様……」

○ 鉄船・矢倉の上

傾いた矢倉の上、対峙する時市と貞道。

兵たちはすでに逃げ出し、他には誰もいない。

貞道「木太刀で稽古をしていた頃が懐かしいな」

刀を抜く二人。  
共に、少年の頃（二五年前）と同じ構え。  
しばし間合いを計った二人、次の瞬間激しく斬り結ぶ。  
剣の腕は互角である。

○ 田園地帯

息を飲み、船上の対決を見ている守重、敵味方の兵たち。

○ 八雲の本陣・前

恒幸も、時市たちをじっと見ている。

○ 鉄船・矢倉の上

鉄船が沈んで行き、矢倉の上にも海水が流れ込む。  
水しぶきを上げる二人の対決、貞道が優勢となり、時市は矢倉の隅に追いつめられる。  
隙を作ってしまった時市に、貞道が鋭く刀を出す。

時市「!!」

○ 海中

沈む鉄船の船底が、海中に突き出た大きな岩に乗る。

○ 鉄船・矢倉の上

衝撃に貞道、体勢を崩す。  
時市、貞道の刀を弾き飛ばし、相手の喉元に刀を突き付ける。

貞道「――!!」

沈降の止まった鉄船。  
動きを封じられた貞道。

時市、そのままの体勢で陸に向かって叫ぶ。

時市「八雲の者たち、見よ！ お前たちの総大将・八雲能地守貞道、これまでだ！ 勝負は決した！ 直ちに囲みを解き、我らが城から引き上げよ!!」

○ 田園地帯

時市の声を聞く兵たち。

時市の声「此度の戦の無益なるは、我ら共に承知のはず！ 更なる遺恨は無用だ！ 急ぎ兵を引き、二度とこの御子柴を侵すではない！ 良いか！」

○ 八雲の本陣・前

恒幸「……」

隣にいた部将が、

部将「生駒様？」

恒幸「……引き上げじゃ。引け貝を鳴らせ」

○ 田園地帯

動きの止まった戦場に、法螺貝の音が響き渡る。

○ 鉄船・矢倉の上

時市、貞道に突き付けていた刀を鞘に戻す。

貞道「(嘲り) わしを殺さんのか？ 五年前も、あの糸川を殺さなかった、お前のその甘さが全ての始まりだったのだぞ」

時市「……わしのために妻子を失い、お前がわしを憎む気持ち、わしを殺しても足りぬほどだろう。だがこの命、詫びとして差し出す訳にはいかん。(日崎城の方を見て) わしは、生きてあそこに帰らなくてはならぬのだ」

貞道「……」

時市「許せとは言わん。ただ貞道……すまん……」

貞道の近くに、一本の槍が流れて来る。

時市は気付いていない。

素早く拾った貞道、時市を突こうとするが、一発の銃声が響く。

時市「!!」

胸に銃弾を受けた貞道が倒れる。

見回した時市、陸の方から近付く、御子柴兵が漕ぐ三艘の小舟に気付く。

その一艘には、まだ煙の上がる鉄砲を構えた克信の姿。

○ 砂浜

岬の付け根の広い砂浜。

泳ぎ着いた八雲兵や水手たち、そして孫蔵がぐったりと座り込

んでいる。

一人離れた場所で、泣き疲れてぼんやりしているサキ。

孫蔵が、ふと気付いて、

孫蔵「おい、サキ……」

サキ、気付かない。

孫蔵「大声で指さし）おい、サキ、見ろ！ あれじゃ！」

浜の向こうから、正吾に肩を借りた茂吉が歩いて来る。

サキ「信じられず）茂吉……茂吉！」

茂吉に駆け寄るサキ。

茂吉「サキ！」

茂吉も駆け出す。

波打ち際で抱き合い、口づけをするサキと茂吉。

一人残された正吾、離れた所からそれを見ている。

正吾「……」

## ○ 小舟

鉄船を後にし、三艘の小舟が岸に向かう。

その一艘には貞道の遺体が横たえられ、一艘には時市と克信が乗っている。

時市「……申し訳ございません」

克信「ん？」

時市「此度の戦、元はといえば全て私の甘さが引き起こした事。そしてまた今、貞道を殺せなかった己の甘さを、御屋形様にお救いいただき……」

克信「悔やんでいるのか」

時市「はい」

克信「うむ……。だが、それで良いのだ」

時市「は……？」

克信「確かにお前の性分、この乱世を生きるには甘過ぎるかも知れん。だが時市。お前がそうした男だからこそ、わしはお前を我が家中に迎えたいと望み、お由比の婿になって欲しいと願ったのだ。——お前のその甘さ、決して恥じるべきでないと思はう」

時市「……」

時市、隣の小舟の貞道を見つめる。

○ 日崎城・時市の家・外観

すぐ近くに、爆発の跡が生々しく残っている。

○ 同・同・内

由比が横になっている部屋に、時市が入って来る。

時市「由比……」

由比「お戻りなさいませ」

由比に付き添っていたセツ、静かに部屋を出て行く。

由比の横には、生まれたばかりの赤ん坊が眠っている。

由比「男（おのこ）にございます」

時市「うなずいて、そなたは大事ないか？」

由比「はい」

布団の脇に座った時市、そっと赤ん坊の頬に触れてみる。

目を覚まし、泣き出す赤ん坊。

時市「困って）あつ……。のう、由比、これはどうしたら……」

由比「大丈夫。嬉しいのでございます。——たとえ今のこんな世であっても、

この子は生まれて来た事が嬉しいのです。こんな世でもあなた様と出会え、これより先、共に生きてゆく事が出来ると、今、この子はそれが嬉しくて泣いているのです」

時市「……」

泣く赤ん坊を見つめる時市。

時市「感情があふれる）——」

時市、顔を伏せて肩を震わせる。

由比、その時市を優しく見つめる。

○ 砂浜

近くに見える田園地帯では、八雲軍の引き上げが始まっている。サキと茂吉、正吾と孫蔵に深々と頭を下げ、寄り添って去って行く。

呆然と見送る正吾に、

孫蔵「あの二人、近々夫婦になるんだそうじゃ」

正吾「……」

孫蔵「まあ、そう落ち込むな。人が生きてりゃな、思い通りにならん事などいくらでもあるもんじゃ。だから——」

正 吾「お前も、あんな女の事など早く忘れる、か？ ま、年寄りの言いそう  
な事だ。——だが爺様。今度の働きで俺が侍になり、そのまま天下を  
取ったらどうなると思う？ さすればあのサキも、茂吉のような抜け  
作は捨て、喜んでこの正吾様の元に駆けて参るわ」

孫 蔵「（ため息）若いな、お前」

正 吾「そう言う爺様こそ、今日は大した手柄だったんだろうが」

孫 蔵「うむ。まあ、走れずとも、年寄りには年寄りのやり方があるという事  
じゃな。もはや一国一城の主など望まぬが、わしもまだまだ、お前の  
ような小僧には——」

と、鉄のきしむ大きな音。

二人、海の方を見る。

## ○ 海中

鉄船の船底が、乗っていた岩の上からずり落ちる。

## ○ 日崎城・大手門の近く

眼前の海、鉄船の天守がゆっくりと沈んで行く。

負傷者の手当てをしていた御子柴兵たち、手を止めてそれを見  
ている。

## ○ 田園地帯

隊列を組んで引き上げる八雲兵たちも、足を止めて鉄船を見て  
いる。

## ○ 日崎城・時市の家・庭

赤ん坊を抱いて立ち、沈み行く鉄船を見ている時市。

腕の中、安らかに眠る赤ん坊に、

時 市「大丈夫、大丈夫だ」

鉄船が完全に海中に消える。

時市が見つめる先には、静かな海がどこまでも広がっている。

終